

☼ 観察者と保育者の対話 (6)

同じ場をつくる異なる思い

谷田部 高子
清水 哲

愛育養護学校では、子どもたち一人ひとりに自分の一日の過ごし方が任されています。子どもたちは誘い合って、よく公園（有栖川公園）へ出かけます。学校の外の社会や自然と触れ合う貴重な活動だと考えています。また、開放感のある場で一緒に遊ぶことは、子ども同士が関係をつくっていく助けにもなっています。ある日の午後、私たちは小学部三年生のKさん、Yさんと公園でひとときを共にすることになりました。同じ保育者としてその場に居合わせた私たちが、そのひとときをそれぞれに振り返ってみたいと思います。

…… 清水さんへ

遊具の広場に着くと、Kさんは一人で駆け出し、『たんけん』（広場や道がいくつもある緑豊かで森のような公園中を散策する）に飛び出しました。Kさんを追っ

て、Yさんと私は『たんけん』に加わりました。Kさんは意気揚揚と先頭を行き、いくつもの分岐を「あっち！」と指差して選び、ぐんぐん進んでいきます。Yさ

んは私におぶさり、階段を駆け下りたり、大好きな歌を歌ったりしながらKさんに続きます。帰りの時間も迫ってきて、Yさんが心待ちにしているブランコをしに遊具の広場に戻ろうという時、Kさんは「おんぶしたい」と私におんぶを求めました。Yさんは「おんぶしちゃうダメ」と譲らず、Kさんはしゃがみ込みました。

このような局面が訪れると、どちらからともなく二人で手をつないで走るようになったり、犬のまねをしながら階段を上ることになったりと、楽しい遊びに転換されることが何度かありました。「ワンワンこつちだワン」と、二人でつくり出した遊びを私から誘ってみますが、どちらの気持ちも動きません。Kさんが『三人だっこ』（二人を一纏に抱っこする）を求めると、Yさんも同意

谷田部さんへ

公園に出かけたYさんとKさんを、私は後から追いかけていくことになり、急いで準備を始めました。財布、携帯電話、タオル……。それから、ドラえもんのお面をか

しました。私は二人を抱き上げ少し進みますが、遊具のある高台までではしんどく感じます。

それは体力的にとりより、この困った状況を切り抜けるのは私の頑張り次第、ということに何かつまらなさを感じていたからかもしれません。二人の間から何か新しい解決策が生まれるのではないかと期待や、自分たちのアイデアやアクションで状況が変わるおもしろさに、また一つ出会ってほしいという思いもあつたように思います。この状況を動かすのは、何か別の次元の発想が入り込むことが必要な気がしていましたが、私たちの間からは、なかなかその風は起きません。そこへ、Yさんの大好きな『しみずドラえもん』がやって来ました。

ばんの中にそつと忍ばせ、学校を飛び出しました。

*

前年度の三学期、たまたまドラえもんのお面をかぶつ

ていた私と出会ったYさんが、私のことを『しみずドラえもん』と呼んでくれたのが、Yさんと『しみずドラえもん』との最初の出会いでした。それからは、「しみずドラえもんは？」と毎日のように出会うことを期待してくれるようになり、出会えるとお互いに見つめ合い、ゆっくりと心を通わせながら過ごしています。Yさんにとって『しみずドラえもん』は、ほかの誰でもない、かけがえのない大切な存在になっているように感じられます。

*

Yさんの期待に応えたいということが頭にあつたわけではなく、「木々が生い茂った公園の中で、Yさんと出会うことができたらうれしいなあ」という私自身の単純な願いから、お面を持って出かけました。

遊具がある広場にYさんの姿は見当たらず、しばらく階段を下りていくと、YさんとKさんが、大好きな谷田部さんの背中（おんぶ）をめぐって、何やらもみくちやになっているのを発見！ 心の中で「これはチャンス！」と思ひながら、二人に近すぎない距離で後ろを向き、ド

ラえもんのお面をかぶってゆっくりと近づいていくと、気づいたYさんが小走りにこちらへ来て、「しみずドラえもん、来た！」とうれしそうに言ってくれました。

「あ！ Yちゃん！ 大好きなYちゃんに公園で会えたよ。うれしいなあ」と思わず抱きしめ、そのまま抱っこをして階段を上っていきました。何やらもめていたのがうそのように、とても自然な形で二人はそれぞれ大人に支えられながら、学校へと向かい始めました。

すると、谷田部さんの背中に乗って少し先を進んでいたKさんも、『しみずドラえもん』に何かを伝えたい様子。どうやら、Kさんも『しみずドラえもん』におんぶしてほしいようなのです。最初は交替することを決めていたYさんでしたが、しばらくすると自分から降りて、Kさんに譲ってあげました。谷田部さんに抱っこされながら少し前を進んでいたYさんが、時折こちらを振り返ってくれるので、「おーい」と手を振ると、ニコッと



笑って手を振り返してくれました。

遊具のある広場まで戻ると、そこから学校までYさんはバギーに乗っていました。ずっと『しみずドラえもん』の手を握りしめていました。私もしつかりと、その手を握り返していました。学校に着くと、『しみずドラえもん』のひざの上にYさんが乗ったり、二人向かい合ってしばらく箱ブランコに揺られたりしながら、何度も見つめ合いました。Yさんが帰る時間になっても、何だかお互いに離れ難く、帰り道の途中まで手をつないで一緒に歩いていき、バイバイしました。「また明日会おうね!」という気持ちを込めて、Yさんとお母さんが

.....
ふたたび清水さんへ
.....

『しみずドラえもん』の登場で、硬直した困った状況は軽やかな楽しい場に転換しました。それは、子どもの思いがぶつかる時、その間に立ち、それぞれを支える大人が二人になったから起きたということではないように思えます。子どもと一緒に困っていたところに、もう一人の大人が子どもに向けるまっすぐな思いと独自の在り方

帰っていく後ろ姿が見えなくなるまで手を振り続けました。

お面を外して冷静に振り返ってみると、ドラえもんのお面をかぶったまま公園から帰ってきて、歩道で「バイバイ!」と一人、手を振り続けている自分って…、と正直恥ずかしくなります。でも、恥ずかしがっているのはあくまで清水で、『しみずドラえもん』ではありません。ただただYさんとの時間が愛おしくて、もう夢中でした。

「Yちゃん、今日はありがとう。ボクの願いがかなったよ。また一緒に遊ぼうね!」

で参加したことが、場を動かし、違う展開に開かれる方になったのではないかと思います。それぞれ違う感性をもち、かわり方も違う大人たちが協働で保育することは、子どものことも大人のことも助けるのだと実感するひとときでした。

(愛育養護学校)